

## 井筒俊彦の「ことば」について

——ことばは経験だろうか——

神谷幹夫

「人生、いつ、どこで、どんなことが起こるかわからない。思いもかけなかったことが、しばしば、起る。」

と、井筒俊彦さんは、その最近の著書『意味の深みへ』（岩波書店）の末尾で、「あとがき」のなかで、いつている。これはよくわかることである。ここには哲学的な問題は何も無い。哲学的な問題提起が可能なのは、それに続く箇所である。

「それにつれて、生涯のコースが、思いがけない方に走りだす。錯綜する因縁の糸の纏れが、様々な方向を変えながら織り出していく生のテクスト。それが人生というものの真の姿なのではなからうか。」

井筒さんの主張は、大胆な読み方をするならば（誤読する）ならば、出来事がその人の人生を決めるといえるだろう。人生の偶然性は、したがって、出来事の偶然性に還元されるであろう。が、はたして人間はいつも、そして人生はつねに出来事の奴隷なのだろうか。われわれは、ほんとうに出来事から自由になれるのか。ここにおいては哲学的な「問いを出すこと」ができるであろう。

「誤読すること」および「問いを出すこと」を考える前に、もう少しわれわれの論を先に展開したい。

もし人生のイニシアティブをもっているものが、（判断や行動ではなく）出来事の方であるとすれば、われわれは出来事にたいして無関心ではいられない。無感覚な態度、非決定的な態度をとるわけにはいかな

いであろう。そしてその結果、最後には、出来事そのものが人生であるという地平に至るであろう。

が、私は思う。出来事は出来事である。人生は人生である。人生は全体的なものであるが、出来事はどこまでも個別的なものである、と。

井筒さんは自己の人生をかえりみて、「もし数年前、あの時点で、イランという国にホメイニー革命が起こらなかつたら、私は、きっと、あのままテヘランで、今でも仕事を続けていただろう」という。井筒さんは、すべての仕事を放棄して、「心ならずも、イランを離れた」。そしてまた、「心ならずも……だが、考えてみれば、それが私の生涯の、運命が用意してくれた転機だったのかもしれない。イランでの仕事に興味は尽きなかった。しかし奇妙なことに、それを棄て去ることを悔む気持は少しも起こらなかつた。それどころか、日航の《救出機》に腰を下ろした時、私はすでに次の新しい仕事を考えていたのだった」という。(強調箇所へ)は井筒さん自身による)

イランでの仕事「脂の乗りきっていた時期」であるにもかかわらず、その仕事を棄ててイランを去ることに、井筒さんは、むしろある種の《救い》さえも感じている。希望(新しい仕事がある)があるからだろうか。

ところで、この「あとがき」には「思いがけぬ」という語がしばしば登場する。「運命」も出てくる。他方、意志や選択を指示する語は見当たらない。

井筒さんによれば、「存在はコトバであり、コトバは意味をもつ」のである。そして「意味の世界は限りなく深い」のである。

ではいつたい、意味はどこまで深まるのか。意味はことばを(すなわち名を)超えて、存在にたいしてさえ優位性をもつのだろうか。井筒さんは「然り」といつているように見える。井筒さんにとって、意味は形成因である(ように見える)。

もしこのように見ることが許されるとしたら、意味性(意味をもつこと)は原因性(結果をもつこと)で

あるどころか、創造性(事物を存在化すること)にほかならぬ。意味は創造するものであるが、しかし何をつくる(存在化する)のか。意味は——。

井筒さんにとって、「意味の深み」という主張は、意味の意味がある、そして意味の意味の、意味がある、ということの内容としたものなのだろうか。となると、シンプルな(最初の)意味と、ダブル(二番目)の意味とはどちらがうのか。またトリプル(三番目)の意味とは——。

意味の意味は、ほんとうに意味だろうか。意味のリアリティを、まだ、十分にもっているといえるのか。意味の意味が、意味であるとしたら、トリプルの意味も意味だから、その場合には、もう意味の意味などという《意味》はない。

はたして意味の意味は、リアルな意味規定をもっているだろうか。

\* \* \*

飛ばしてきた問題にもどる。《誤読する》ことと《問いを出す》ことである。

後者から語る。しかし問題の核心は同じであろう。ともにリアリティの問題であるから。あるいは行為の問題であるともいえる。

アランが、問いを出すという行為の問題について、つぎのようなことをいつている。

「ある人がほくに、右派と左派との分裂は、右の人間と左の人間との分裂は、まだ意味があるのか、と訊いた。このとき、ほくがまず思ったことは、この人はきつと左の人間ではないということだ。」

人が問いを出すとき、人は自己のリアリティを他者にぶつけているのである。誠実であるならば——。またここでは誠実であるはずだ。嘘をいう意味がないからだ。ごまかしていたら、何ひとつ学ぶことができないからである。人はごまかされないために、聞くのである。問いを出す勇氣をもつのである。

(三五)

問いを出すことは、大胆な冒険である。知らない国の人たちと話すようなものだ。

問いを出すことは、また、他者のリアリティを疑うことであろう。自己のリアリティを確かめる行為でもあろう。そして、究極において問いを出す行為が重要なのは、この行為を通して、われわれはリアリティから、いつとぎの間、自由になることができることである。ほんとうは自由になったと思っただけにすぎないと、反論する者がいるかもしれない。しかし、「ただ思っている」というリアリティ(個のそれ)と、「ことば」のリアリティ(普遍のそれ)とのあいだに、はたして明確な相違があるだろうか。行為においてはつきりとした相違があらわれるほどの一線を、両者のあいだに引けるだろうか。

絶対的かつ全体的な「リアリティ」にもアキレス踵がある。「時」を所有することができないのである。あるいは、リアリティは時間に無関心だといったほうがいいかもしれない。時間にたいして意志決定をしないのである。時間のなかで、時間を通して、個と普遍とが結ばれるのである。このような意味の時間を、ひとは「行為」と呼ぶことができる。

#### 《誤読すること》について。

井筒さんは、『意味の深みへ』のなかで、文献学的方法をとらないで、オリジナルな思想を求めて古典を読む「読み方」があることに触れている。「誤読」に市民権をあたえている。「誤読」のプロセスを経ることによってこそ、過去の思想家たちは現在に生き返り、彼らの思想を潑刺たる《今》の思想として、新しい生を生きはじめなのだ。(二二九頁)と、井筒さんは主張する。(強調箇所へ)は井筒さん自身による)

過去が現在に生きるということ、そこから必然的に、現在が未来を予見する、未来につらなるといふこと。一人の人間がものを読むという行為はこのことにほかならない。この行為はリアルな現実である。必ず明確な結果をとまなうものである。

井筒さんの「誤読論」は、ある意味では、思想が生きただものであることを示している。

思想はいつも生まれるものだ、私は思う。

\* \* \*

井筒さんは、その著書『意識と本質』（岩波書店）のなかで、人間の意識なるものは不可解な、未知朦朧としたもの、否、得体の知れぬ異邦人（よそのもの）であると見ている。

「底の知れない沼のように、人間の意識は無気味なものだ。それは奇怪なものたちの棲息する世界。その深みに、一体、どんなものがひそみかくれているのか、本当は誰も知らない。そこから突然どんなものが立ち現われてくるか、誰にも予想できない。」（一八六頁）

井筒さんにとって、意識それ自体は御しがたいものである。また馬を御するように、意識を御する必要もない。なぜなら、井筒さんによれば、意識は必ず、ある方向性をもっているからである。だから、漠然としているように見える意識も、じつは、ちゃんと秩序（命令）をもっているわけである。だからまた、意識は、「無気味なもの」「奇怪なもの」であつても怖いものではない。意識は、「私」を無化するもの（あるいは消し去るもの）ではないのである。この意味では、井筒さんのいう「意識」は「私」を、まったく新しくするものではない。

『意識と本質』の冒頭において、井筒さんは、サルトルの意識観念を批判している。井筒さんによれば、サルトルは、意識を「自己の外へ滑り出すこと」とあるといい、「意識には〈内部〉なるものはない。意識は己れ自身の〈外〉以外の何ものでもない」（強調箇所）は井筒さん自身による」という。これをうけて、井筒さんは、こういつている。

「だが、いくら己れの外へ不断に滑り出す、といつても、なんの方向性もなしに、むやみやたらにただ脱走するわけのものではあるまい。必ず何かに向つて、Xに向つて滑り出して行くのである。」（六頁）

ここにはサルトルの考えとはまったく別の、井筒さんの考え（オリジナルな誤読？）がある。なるほど意識というものが、ある対象の意識であるかぎり、意識が明確になるのは、ある対象に即してである。しかしこの意識は、対象のとりこになつてはいない。意識は対象を見ている。だが、対象に「否」をいうこともできるのだ。意識は対象に同化されない。意識は物ではない。

対象はそれ自身、リアリティではない。対象は意識のはたらきをまつて、リアリティを現出せしめる。意識が対象を実在化する。意識は、だから、対象に嵌入しない。意識は、ある意味において、対象を超越している。意識は対象から自由となることができる。（否、意識は対象から超越するのみならず、自己をも乗り越えようとするのである。意識は、意識の対象を切る、分ける。そして対象に向かう自己をも分析する。が、しかし意識のはたらきそのものが分割されることはない。半分考えることができないうように、半分意識することもできないのだ。意識には、だから、〈内部がない〉のである。意識はまた、物ではないのである。）意識の問題は、こうして「自由」の問題となるのである。

意識が物でないということばは、他方において、意識はもはや単純なる「私」でもないのだ。自己よりも以上にリアルな自己である。自己が自己であるという明晰さよりも以上に、意識は明晰な「自己」である。意識はつねに自己でないもの、自己の所有しえないものを現出せしめるからである。意識が自己の外界だという意味は、意識するという行為は他者をつくり出す（明晰化する）ことを示唆している。

井筒さんは、「意味の深みへ」のなかで（ことに「混沌論」（第八論文）のなかで）、「コトバの存在喚起力」にもとづきながら、「存在はコトバである」ことを主張している。たしかに、名のないものは存在しない、人間経験においては。このかぎりでは、ことばが存在の根本原理であるという、井筒さんの考えは正しい。井筒さんは、「カオス的『無』が経験的『有』に転成する」とき、まず、光が、すなわち光というコトバがつくられたことに注目している。そして「光が、経験的に、存在顕現の源泉であることはいうまでもない」と強調する。そこでこのような具体例をあげている。

「ある種の土地の隆起が『山』と名づけることによって山という〈もの〉になり、ある種の水が『川』と名づけることによって川という自己同定性を獲得する。」

この意味内容は、おそろくつぎのように取ることができる。土地が山に転成する、水が川に転成する、と。そして、なぜあの山が富士山なのか、なぜあの河がセーヌ河なのか、という問いは、ここでは問われないのである。

命名の問題は、すぐれた意味において、人間経験の問題である。われわれは、あるものの名を口にすることによって、それを経験しているのである。この経験は、過去にさかのぼり、未来にまで延びて行く。この経験は、今までの世界を超えて、新しい世界をつくる。いずれにせよ、それはわれわれに「世界」をあたえてくれる。

こうして、ことばを口にすることは、一つの行為であり出来事である。否、それは「思いもかけぬ」出来事である。モーセはイスラエルのすべての人を召し寄せて言った(申命記五・一二)、「あなたの神、主の名をみだらに唱えてはならない」と。

ことばの問題は、リアリテイの問題と切り離すことができない。(心象として実在的ではないとはいえないのだ。)ことばが明晰であるように、リアリテイは明晰なものである。ことばが規定するように、リアリテイは命令するからである。国家が政府に命ずるように、リアリテイは秩序に命ずる。(秩序は、ここでは従うものである。)命令は明晰なものである。

井筒さんは、「『光』とは、存在の区割が見えること、物と物との境界がはっきり見てとれること」だという。そして「光の照射を浴びて、万物はそれぞれのあるべき姿を見せる」と主張している。この考えは、物

を物として明晰化するのが光である、ことばである、とも読むことができる。明晰ということ、これはリアリティともいえよう。精神の営みである意識は、外界が立ちあらわれるリアルな行為である。

(一九八七年一月二十八日)

(四〇)